



## 令和5年度「船上山スキルアップセミナー①②」実施報告書

### I 事業の概要

#### 1 期日

スキルアップセミナー① 令和5年5月13日(土)

スキルアップセミナー② 令和5年5月27日(土)



#### 2 日程

スキルアップセミナー① 5月13日(土)		スキルアップセミナー② 5月27日(土)	
9:30	受付	9:30	受付
10:00	出会いのつどい	10:00	出会いのつどい
10:15	主催事業についての説明	10:15	交流レクリエーション
11:00	交流レクリエーション	10:45	ちっちゃい探検隊①について説明 ・役割分担
12:00	昼食	11:20	ナイト企画について
12:45	館内オリエンテーリング	12:00	昼食
14:10	ニュースポーツ体験	13:00	ナイト企画について
15:35	子どもたちとの関わり方について	14:00	ちっちゃい探検隊①に向けての 練習・準備
17:15	夕食	17:30	夕食
18:00	ふりかえり	18:15	解散
18:15	解散		

### 3 ねらい

- ・学生たちが船上山少年自然の家の主催事業「ちっちゃい探検隊」についての理解を深める。
- ・ちっちゃい探検隊へとつなげていくために、少年自然の家の様々な活動プログラムを体験する。
- ・グループでの体験活動を通して、学生同士の親睦を深める。



### 4 参加者数

スキルアップセミナー①18名

(島根大学11名、鳥取看護大学2名、鳥取短期大学1名、鳥取環境大学1名、鳥取大学3名)

スキルアップセミナー②18名

(島根大学10名、鳥取看護大学3名、鳥取短期大学1名、鳥取大学4名)

### II 実施状況

コロナの5類移行に伴う、島根大学の学生ボランティアの宿泊許可が、スキルアップセミナーの募集期間に間に合わなかったため、スキルアップセミナー①②は今年度も日帰りにて実施した。

#### 【スキルアップセミナー①】

交流レクリエーション、館内オリエンテーリング、ニュースポーツを実際に体験してもらい、学生同士の交流を深めることができた。今年度は、ちっちゃい探検隊へつなげることを意識して、子どもとの関わり方について話



し合い、ロールプレイを行う時間を確保した。話し合いでは、泣いている子どもへの対応など実際に起きそうな場面について対応を考え、意見を交換しあうことができた。ロールプレイでは、各班で考えた対応を発表することで、考えを共有しあうことができ、充実した時間となった。

### 【スキルアップセミナー②】

スキルアップセミナー①から連続参加の学生11名以外に、新たなメンバーを7人迎えてスタートした。

はじめに、過去のスライドショーなどで、ちっちゃい探検隊①の説明を行い、学生の役割分担を行った。ちっちゃい探検隊当日に参加できる学生が9名しかいなかったが、役割分担は話し合っただけで決めることができた。

今年度はちっちゃい探検隊①に向けて、ナイト企画の一部を学生のアイデアで実施できるように話し合い活動を行った。令和元年までの学生企画の時代に負けないくらい、熱い話し合いとなり、学生たちのエネルギーを感じたひとときとなった。この話し合いを持ったことで、当日参加できない学生も他人事にすることなく達成感を得ることができ、当日参加する学生は当日の活動に向けて、主体性を持つことにつながったのではないかと感じた。

## Ⅲ 総括

### 1 参加者の感想(抜粋)

- ・班で話し合う活動を通して、思いつかないようなアプローチ方法が気づけた点良かった。間違いなく、今後の自分に良い影響を与えるセミナーだと実感した。(スキル①)
- ・ちっちゃい探検隊①は成功するように思えました。この船上山のスキルアップセミナーは自分だけでなく周りの仲間と一緒に成長できるので、とても楽しいです。本番も頑張りたいです。(スキル②)
- ・たくさんの意見の中でブラッシュアップすること、折り合いをつけるのは大変だったが、企画を1から作ってみたいという気持ちが大きくなった。(スキル②)

### 2 成果

- ・スキルアップセミナー①②とも、話し合い活動を設定したことで、学生が主体的に取り組む姿が多くみられて良かった。
- ・学生が主体的に取り組む「ちっちゃい探検隊①」にするために、限られた時間の中で、学生の意識づくりができて良かった。

### 3 課題

- ・スキル①～③連続参加の学生が5人と、少ない状況。連続参加の学生をより多く確保できるよう、募集方法を工夫改善する余地がある。
- ・次年度はスキルアップセミナーで学生企画を練り上げることができるようになりたい。その実現に向けては、中心となる学生の存在が必要だが、現状では中心となる学生の育成が十分ではない。年度末までに学生のリピーターを増やし、次年度に向けて学生を育成することが課題となる。

